

1603—1868  
江戸時代

読み解く  
経済で  
日本史

まえがき 経済の主導権を奪ったのは名もなき一般庶民だった

本シリーズは歴史に経済というモノサシを当てて、見えなかったものを見えるようにする試みです。

歴史教科書では、秀吉が死去すると、朝鮮出兵は終わり、その後関ヶ原の戦いがあったて江戸幕府が成立すると習います。安土桃山時代が中世的な権門政治を打破した画期的な時代であったこと、そもそも権門政治とは何だったのかも習わずにひたすら発生した順に丸暗記。これで歴史に興味を持ってと言われても無理です。そんな苦しい丸暗記などせずとも、当時の損得勘定（経済観）に結び付いた人々の意図を知れば、歴史的イベントの発生理由や前後の関係はすんなり頭に入ってきます。手前味噌ながら、これで歴史嫌いも治るはずですよ。

例えば、経済の観点から見ると江戸時代とそれ以前では全く異なる点があります。有史以来、日本経済においてあれほど大きな存在感を示した寺社勢力は江戸時代に入りついに没落しました。その理由は簡単です。秀吉の治世から日本が独自に通貨を

発行するようになり、家康以降それが全国津々浦々に浸透したからです。

信長以前の日本に独自通貨はなく、支那から海を渡ってやってくる銅銭を通貨として流通させていました。銅銭は交易の対価としか得ることができず、よって交易を握る者は自動的に中央銀行の役割を果たすこととなります。

比叡山延暦寺をはじめとする寺社勢力は古くから貿易船のスポンサーであり、留学僧の送り手です。支那との長年のコネクションを使い、商売に励むことで大量の銅銭を得ることができました。文字通り、中央銀行のような役割を演じていたわけですよ（詳しくは本シリーズ第1巻『経済で読み解く日本史〈室町・戦国時代〉』、第2巻『経済で読み解く日本史〈安土桃山時代〉』をお読みください）。

しかし、ここに問題があります。元々、宗教家の商業活動はお堂の普請やお祭りの資金集めのために行われていました。いくら規模が大きくなっても、比叡山は比叡山のことを考えて商業活動を行っているだけで、日本の中央銀行としての自覚は生まれません。それは臨済宗でも、浄土真宗でも、日蓮宗でも同じことです。集めた資金はあくまでも宗教活動に使われるのであって、それ以上でもそれ以下でもありません。幕府に献金する目的も、あくまで幕府の庇護を得て宗教活動を継続するためです。

このような思惑に基づいて行われる金融政策は、必ずしも日本全体にとって適切なものではありません。しかも、15世紀後半には支那からの銅銭流入量が減少し始めました。貨幣不足によって日本経済は大混乱に陥ります。ところが、元々中央銀行としての自覚のない寺社勢力がこの混乱を収めるために「全国寺社会議」を開くようなことはしませんでした。元々、寺社勢力が行っていた金融活動はあくまで宗門を發展させるための手段でしかなかったからです。

日本経済最大の危機を打破したのが信長と秀吉です。信長は比叡山を焼き討ちし、石山本願寺を包囲して屈服させるなど、寺社勢力に徹底的にダメージを与えました。そして、この路線を継承し、政治的にも軍事的にも完全に寺社勢力の牙を抜いたのが秀吉です。その秀吉が発行した日本初の独自通貨が天正大判でした（本書では、和同開珎など皇朝十二銭は現代的な意味での通貨ではないと解釈しています）。

この貨幣政策を継承発展させたのが家康です。家康は慶長小判を鑄造し、金銀銅の交換レートを設定することで日本独自の通貨制度を打ち立てました。そして、このことが日本経済に大転換をもたらしました。

本シリーズ第1巻で取り上げた室町時代において、経済の主要なプレイヤーは寺社勢力でした。そして第2巻で取り上げた安土桃山時代はその座を大名が奪いました。江戸時代になってからも、最初のうちは幕府や大名が経済の主要なプレイヤーでした。しかし、次第にこれらの勢力は没落し、経済の主導権は奪われていきます。誰に？　なんとその主導権を奪ったのは、名もなき一般庶民でした。これこそが家康がもたらした大転換なのです！

当時の言葉で一般庶民は百姓とか町人と呼びます。百姓とは百（たくさん）の姓を総称する言葉であって、必ずしも農民とは限りません。実際に、当時農村に住んでいた人々は年貢米以外にも多くの商品作物や手工業品を生産し大都市に供給していました。

一般的に日本人は「貧農史観」に毒されており、江戸時代といえは重い年貢に苦しむ農民とか、代官に賄賂を贈る越後屋などの悪徳商人とか、武士も貧乏して家計簿を付けているとかそんなイメージでしかとらえていないのではないのでしょうか。水戸黄門や『カムイ伝』の影響は本当に侮れません。

しかし、実際のところ農民は大都市の市場動向を見て「儲かる商品」を作りまくって現金収入を得ていました。もちろん、所得税や消費税の存在しなかった時代ですの

で、こちらのサイドビジネスはノータックスです。中には、船を買ってより高く売れる市場に商品を直接持ち込むツワモノも現れました。巨大な海運と金融と商社のコングロマリットを形成するまでに至った銭屋五兵衛のようなカリスマ経営者もいます。

もちろん、江戸時代より前から百姓たちは経済活動をしていましたし、一代で巨万きりまんの富を築き上げた人物もいたでしょう。しかし、百姓が市場の主導権を握り、日本経済を動かすというのは室町時代では考えられないことです。なぜそんなことができたのか？ この点については本文中で詳しく解説してありますのでぜひお読みください。

百姓とは逆に、武士は石高制いしかうせいの呪縛じゆばくによってどんどん貧乏になっていきました。税収をコメによる物納ぶちのりに頼り、公務員の給料をコメの現物支給で行う状況を考えてみてください。コメの値段が高いうちはいいですが、コメの価格が下がってしまったら同じ1石でも通貨で見た価値は下がってしまいます。江戸時代は爆発的な経済成長により、人々の趣向は多様化しました。コメさえ食べれば幸せだったそれ以前の時代とは全く様相が違います。コメよりも豆腐や魚やスイーツへとグルメ志向は止まりません。当然、コメの値段が上がるわけありません。時代劇の武士が貧乏だったというイメージだけはウソではなさそうです。

しかし、そんな江戸時代も一本調子で景気が拡大していたわけではありません。時として訪れる好況と、その後にくぐってくる不況を繰り返していました。この景気循環は、江戸幕府の経済政策によってもたらされたものです。将軍が交代するたびに緊縮派と緩和派が入れ替わり、不況と好況の間を行ったり来たりしました。

また、貨幣制度をめぐることは、全世界に先駆けて先進的なイノベーションが起こります。しかし、このイノベーションはあまりにも先進的過ぎたために、使っている日本人の大半がその本質的な意味を理解していませんでした。

目の前にあって、あまりにも当たり前なのでその価値に気付かない。フランスにファッションの勉強をしに行った日本人が、フランス人デザイナーから日本の伝統芸能のすばらしさを教えられてしまうようなあの感覚です。日本の貨幣制度は、それぐらいの大進化を遂げていたのです。

安土桃山時代から引き継いだ強大な軍事力と、貨幣経済の革命による経済成長。まさに当時の日本は東アジアの強国であり、西欧列強も簡単には手出しできません。徳川幕府が「貿易は制限させてもらいます」と言えば、西欧列強もそれに従うしかありませんでした。

そして、国内においても、室町時代からあれほど強迫神経症的に繰り返していた戦争が全く起こらなくなりました。まさに奇跡です！

ところが、平和が続くと必ず発生するのが平和ボケ。強大な軍事力と、驚異の経済成長という2つの武器は150年ほどで錆びついてしまいました。それとは正反対にますますパワーアップする西欧列強！日本はこの外圧に耐えられるのか？その結末はぜひ本文でお確かめください。

日本人が日本の歴史を知らないということは、悲劇以外の何物でもありません。

本書が読者のみなさまにとって、改めて日本の歴史を知るきっかけとなれば幸いです。ぜひ最後までお読みください。

経済で読み解く日本史〈江戸時代〉 もくじ

まえがき ー 経済の主導権を奪ったのは名もなき一般庶民だった 2

## 第一部 飛躍的に発展していた江戸時代の経済

### 第一章 「貧農史観」を捨てよ！

#### I 絶対に笑ってはいけない、歴史教科書24時

本当に「農民」は貧しかったのか 21

歴史教科書には矛盾が満載！ 24

「百姓一揆」が吹き荒れる中、人口は増加した!? 27

幕府が突然、財政難に陥った謎 30

「貧しさ」の定義もあいまい 32

## II 真実の江戸時代を徹底検証

江戸時代を貫く「枠組み(フレームワーク)」とは何か 36